さて清文鑑和解五册は、乾隆の增訂清文鑑首卷から第四卷に至るまでを和解したもので、第二卷が上・下兩册に分たれてある外、一卷一册都合五册で終つて居る。第二卷と第三卷との題名が飜譯清文鑑となつて居ることは、既に新村博士により傳へられて居る。この飜譯や校合に從事したのは、滿語纂編の編纂にも從事した鄭永寧・顓川雅範・彭城昌宣・彭城廣林・顓川春重の諸通事で、これ等が二人若しくは三人一組になつて各卷を分擔したことは、各卷の初めに譯述者校合者を示して居るところにより知り得られる。此の書の體裁は挿入寫眞について認められるやうに、增訂清文鑑所收の滿洲語に我が片假名を用ゐて讀み方を示し、漢語の譯はそのまゝに移寫し、各語の下に註せられた滿文には、それぞれ丹念に邦語譯を施してある。嘉永四年以來毎年一册譯述した成績であるから、このまゝの歩調では清文鑑一部三十二卷を譯するのに三十二年間を要する筈で、隨分漫歩といはねばならぬ。

飜譯滿語纂編五卷十册は、前記清文鑑所收の滿洲語が部門別けになつて居るのを改めて、滿語の字頭によつて集錄したものである。部門別けでは辭書として用ゐるのには不便至極であるからこれを字頭順に改編することは、この書を活用しようとする誰もが試みることで、高橋の滿文輯韻の如きもその例に外ならぬ。併し滿語纂編は初めから清文鑑の同字頭の語のすべてを順次集めようとしたのではなく、その中の或る語を一卷中に幾つかづゝ採錄したのであつて、その方針は第一卷々頭の序文の次に附けた凡例について認むることが出來る。卽ち

一、夫此編ヲ纂スルハ滿洲通語脩學ノ試業課目ヲ設ケ、清文字母句首ニ置テ語ヲ成ノ要八十七字ヲ擧テ、學人十四名ニ分派シ、字母ノ次第ニ順ヒ、毎字二三句、或ハ五六句、綜計四百零二句ノ詞を譯編シテ册ヲ成シ、飜譯滿語纂編ト標題シ、毎歲抄本二三册……公廳ニ進呈ス。各自……頭幾十句ノ下ニ其姓名ヲ書載スルハ、此際